報告

高齢者看護学実習における学生の複数患者受け持ち方式の検討

西尾ゆかり[1]　太田節子[1]　菅浦真以[2]　萩原淳子[2]

[1]滋賀医科大学医学部看護学科臨床看護学講座　[2]滋賀医科大学医学部附属病院

要旨

本研究の目的は、学生の臨地実習における看護実践能力を高めていくために、高齢者看護学実習で導入した「複数患者受け持ち方式」に関する学生及び臨地実習指導者の意見を質的に明らかにし、今後の効果的な臨地実習指導の方法を検討することである。研究対象は、高齢者看護学実習を終了後、本研究に承諾の得られた滋賀医科大学医学部看護学科４年次生 30 名（男性１名他女性）と高齢者看護学実習の臨地実習指導者２名で、調査内容は、複数患者受け持ち方式に関する自由な意見を調査票にて聴取した。分析は、得られたデータを一文一意見としてラベルを作成しカテゴリー化した。その結果、得られたラベルは、学生から 48 枚、臨地実習指導者から６枚となった。さらに学生と指導者各々ラベルを分類・整理した。学生の意見は、ラベル数の多い順では、１.【高齢者実習（以下実習と略す）からの学び】、２.【実習時の戸惑い】、３.【実習後の展望】、４.【実習での活用なし】の４カテゴリーとなり、これらのカテゴリーには、１から６の中カテゴリーが認められた。また、臨地実習指導者のラベルは、１.【学生の意識の変化】、２.【学習内容の増加】、３.【複数患者受け持ち方式の限界】の３カテゴリーに分類され、各中カテゴリーには１から２の中カテゴリーを認めた。今後は、複数の患者への学生の戸惑いを慎重に受け止めながら、臨地実習の過程で徐々に現実的な臨床環境への適応を促進できるように教育することが望まれる。

キーワード：高齢者看護学実習、複数（ペア又はトリオ）患者受け持ち方式、看護学生の実践能力強化、臨地実習の改善

１．はじめに

急速な少子高齢社会の中、日本における医療施設では、医療技術の進歩が著しく、医療の質向上を目指した高度な看護援助が要求されている。一方、医療制度や介護保険制度等の変化により、患者や利用者の権利意識は向上し、患者の心身はもとより様々な情報を含む医療安全やプライバシー保護等が重視され、複雑な情報と多様な価値観を基盤とした看護実践が実施されている。

看護基礎教育では、このような複雑・多様化した臨床現場で段階的に臨地実習を行っているが、学生が履修した学内の授業（理論）と演習で学んだ技術だけでは到底対応しきれない看護技術の落差が、看護基礎教育と臨床現場には認められる。

高齢者看護学実習では、一人の患者を受け持つことを基本としているが、身体侵襲を伴う採血等の看護技術は、ライセンスがないため見学にとどまり、コミュニケーション、食事、清潔等の日常生活援助についても１週間という短期間の臨地実習では、指導者の監視下で行うこととなり、主体性が発揮しにくいことが課題となっている。

高齢社会に将来貢献する看護職を育成する目的で、平成元年のカリキュラムで新しく設立された「老人看護学」は、平成８年のカリキュラム改正を経て、更に平成21年の改正を迎えつつある。平成18年３月から平成19年３月まで検討された「看護基礎教育の充実に関する検討会」では、日本の看護基礎教育の現状を「学生は臨地実習の範囲や機会が限定される方向にあり、卒業時に一人でできるという看護技術が少なく、就職後、自信が持てないまま不安の中で業務を行っている。新卒者の中にはリアリティショックを受ける者や、高度な医療を提供する現場についていけないため早期離職する者もいる」[1)]としており、「複数の患者を受け持つことや、夜間実習も可能な範囲で導入するなど、より臨床実践に近い状況で実習できる単位数を増加する改正案」[1)]を提言している。

そこで、本学高齢者看護学実習では、臨地実習指導者の協力を得て、１週間の高齢者看護学実習における複数患者受け持ち方式を導入した。その成果を学生及び臨地実習指導者からの意見からまとめたので報告する。

２．研究目的

高齢者看護学実習で導入した「複数患者受け持ち方式」に関する学生及び臨地実習指導者の意見を明らかにし、今後の効果的な臨地実習指導の方法を検討する。

３．用語の定義

複数患者受け持ち方式：看護学生の看護実践能力を強化

するために高齢者看護学教員が開発した臨地実習方法である。学生の受け持ち患者は1名（看護過程記録も1名）とする。また1グループ6名の学生をペア（学生数が5名と7名はペアとトリオ）とした。学生は、受け持ち患者の援助を主としながら、ペア又はトリオ学生の患者の看護計画立案へも参加し、受持患者に治療やケア等がない場合には、ペアまたはトリオ学生の受け持ち患者の治療・ケアに参加する方式である。

4．指導方法及び体制

大学の臨地実習指導者は、病院の臨地実習指導者と共同して次のように指導する。

1）患者選定と学生の受け持ち患者

ペア又はトリオ学生の受け持ち患者には、例えば、重症患者と退院患者のように、健康障害のレベルが異なる患者を、指導者が割り当て、援助技術の偏りを少なくし、複数の看護技術が学習しやすく配慮する。

2）指導方法

指導者は、ペア又はトリオの学生を対象に、複数の学生を同時に指導する。

5．研究方法

1）研究デザイン　　質的研究

2）研究対象

研究対象は、①研究の趣旨を文書で説明し、研究協力に承諾が得られた、滋賀医科大学医学部看護学科4年次生31名（男性1名）。②研究の趣旨を文書で説明し、研究協力の得られた臨地実習指導者2名（女性のみ）。

3）データ収集の方法

①学生には、高齢者看護学実習終了後、無記名の調査票に、自由記述してもらった。調査内容は「今回の複数患者受け持ち方式について、高齢者看護学実習後の感想を自由に記載して下さい」とした。②臨地実習指導者については、口頭で、指導後の感想を尋ねた。

4）分析方法

（1）学生の調査票を精読し、一文一意見のラベルを作成する。これらのラベルを、研究目的の視点に沿って分類・整理して、その内容の特徴をカテゴリー化する。

（2）臨地実習指導者の意見を精読し、一文一意見のラベルとする。これらのラベルを分類・整理してカテゴリー化する。

（3）学生の意見と臨地実習指導者の意見のカテゴリーを比較して、今後の指導方法を検討する。

6．倫理的配慮

①学生へは、研究協力は任意であり、成績には無関係であること、調査票記入は学生の希望時間にすること、研究参加の中止はいつでも可能であること、調査票は無記名であり、プライバシーは保持されること、データは研究以外の目的には使用せず、厳重に管理し、研究終了後は破棄されることを説明した。②臨地実習指導者に対しても、同様の倫理的配慮を実施した。

7．結果

1）学生の意見（表1）

研究に同意の得られた学生は31名であったが、調査の記載のない学生が1名で、最終的に調査対象学生は30名であった。学生の「複数患者受け持ち方式」に対する意見を、一文一意見としてラベルを作成したところ、ラベル総計は、48枚であった。カテゴリー分類記号には、大カテゴリーを【　】、中カテゴリーは《　》で示し、（　）内にはラベル数を示す。

ラベルを分類・整理した結果、1．【高齢者看護学実習（以下、実習と略す）からの学び】(35枚)、2．【実習時の戸惑い】(8枚)、3．【実習後の展望】(4枚)、4．【実習での活用なし】(1枚）の4カテゴリーが明らかとなり、各カテゴリーには、次のように、中カテゴリーが認められた。以下、大カテゴリー順に、中カテゴリーの内容を示す。

（1）【実習からの学び】

この大カテゴリーには、6つの中カテゴリーを認めた。先ず、①《タイプの異なる患者を学ぶ機会》という中カテゴリーが最も多く、「関わりが異なる2名の患者を観る機会ができ、多くの学びができた」等12枚のラベルがあった。次は、②《具体的な看護援助の学び》で、「援助や工夫が必要な患者とそうでない患者を受け持つことで、たくさんのケアに参加したり実施できて、たくさんのことを学べた」等10枚のラベルを認めた。③《学生間の情報の共有》では、「ペアだけでなくグループでもよく情報交換できた」等6枚のラベルを認めた。更に、④《実習の効果的調整》では、「複数の受け持ちでも忙しいと感じることは少なかったので負担にもならなかった」等4枚のラベルがあった。⑤《実習により患者の個別性を学ぶ》とする中カテゴリーでは、「多くの患者を受け持たせてもらうことで個別性について考えることが出来た」等のラベルが2枚あった。⑥《指導者の声かけで実際が学べた》とする中カテゴリーには、「指導者さんがいろいろなケア見学に声をかけてくださったので、ケアの実際について学ぶことができた」とするラベルが1枚あった。

（2）【実習時の戸惑い】

この大カテゴリーには、4つの中カテゴリーを認めた。先ず、①《ペア患者への関わりの戸惑い》とする中カテゴリーで、「ペアの人の受け持ちの方に、どのくらい関わってもよいのか、自分の立ち位置に戸惑った」等のラベルが4枚見られた。また、②《自分の受け持ち患者で

精一杯》の中カテゴリーでは「自分の患者だけで精いっぱいになってしまい、ペアの担当患者のところに行けなかった」等2枚のラベルがあった。③《自立度の差が違いすぎる患者との関わりの戸惑い》では「あまりにも自立度に違いがありすぎて関わりが薄かった」というラベルが1枚であった。④《担当ナースの違いによる戸惑い》とする中カテゴリーには「担当ナースが違うと行動がしにくい時もあった」とするラベルが1枚見られた。

（3）【実習後の展望】

この大カテゴリーには、中カテゴリーは 2 つである。①《他領域臨地実習との関連》では、「他の臨地実習でもペアで行動できたらいいのにと思った」等3枚のラベルを認めた。②《ペア以外の患者とも関わりたい》とする中カテゴリーでは、「ペアの方法もいいと思うが、他のメンバーの患者とももう少し関わってみたかった」とするラベルが1枚あった。

（4）【実習での活用なし】

この大カテゴリーでは、《複数受け持ち実習は出来ない》とする中カテゴリーで、「あまり活用できなかった」とするラベルが1枚であった。

2）臨地実習指導者の意見

臨地実習指導者2名からの意見は3つの大カテゴリーがあった。

（1）【学生の意識の変化】(3枚)

この大カテゴリーには、1つの中カテゴリーを認めた。《お手伝い感覚から意識的関わりへ》という中カテゴリーでは、「以前は担当以外の患者には、その場限りでセルフケア援助だけの参加であり、お手伝い感覚であることが多かったが、ペア制度ではその感覚はない」「ちゃんと何か得ようという意識があるように感じた」等ラベルが3枚見られた。

（2）【学習内容の増加】(2枚)

この大カテゴリーには、①《学習機会の増加》という中カテゴリーで「身体面の援助だけでなく、いろいろな面で勉強できる機会が2倍になっていた」というラベルを認めた。②《看護技術経験項目の増加》という中カテゴリーでは、「ペア患者にも接することで、経験項目が断然多くなった」とするラベルがあった。

（3）【複数受け持ち方式の限界】(1枚)

この大カテゴリーには、《不十分な調整能力》という中カテゴリーがあった。このラベルは、「時間調整能力の向上はペア方式では不十分かと思う」であった。

8．学生及び臨地実習指導者の意見の比較と今後の指導方法

以上の結果から、高齢者看護学実習における複数患者受け持ち方式を検討する。

1）複数患者受け持ち方式の効果

高齢者看護学実習の臨地実習指導者と学生の意見から、学生の受け持ち患者が基本的に1名でも、複数患者を受け持つ体制を工夫することで、次の効果が得られた。①タイプの異なる患者とその看護技術を複数学ぶこととなり、1 週間という短時間でも学生の学習機会が増えた。②複数患者を共有することで、援助技術項目の具体的体験が増加した。③学生は、互いの患者情報を交換して共有することになり、学生間におけるケアの協力を学習した。④複数患者を受け持つことは学生の視野を広げ、受け持ち患者の個別性をより理解しやすくした。これは、学生の交友関係の良いグループダイナミクスを活かして、患者の看護を複数比較しながら、受け持ち患者の看護の優先度を学習する機会を得たものと考える。

2）複数患者受け持ち方式の学生の戸惑い

学生の意見には、自分の受け持ち患者の援助で手が一杯で、ペアやトリオの受け持ち患者の援助まで手が回らないという意見や、受け持ち以外の患者への関わりに対する戸惑いがあった。これは1名の患者しか受け持ったことがない学生の特徴と思われる。また、社会人体験のない学生が、患者のＡＤＬ差が大きいことや担当ナースが異なる場合等、種々の学習条件の違いで、戸惑うのも無理はない。従ってこのような戸惑いに、どう判断、対応して調整していくのか、学生自身が考えていけるよう指導することが必要と思われる。臨地実習指導者の学生への声かけや、役割モデルとしての存在は重要であると考える。最終学年の学生がこのままでは、卒業後、新卒看護師に生じやすいリアリティショックを受けやすくなると考える。臨地実習でも、複数患者への看護に関する準備を徐々に鍛えておく必要はあると考える。

3）今後の臨地実習指導について

今回は1週間の高齢者看護学実習で複数患者受け持ち方式を採用したが、一部の学生は、臨地実習に「活用できなかった」としていた。学生が病棟や新しい臨地実習方式に慣れるためには時間を要するため実習期間を増やす必要が考えられる。また、「他の臨地実習でもやってみたい」という学生もおり、全体的には、学生はこの方式を肯定的に受け止め、短期間でも効果的な活用をしていたので今後も継続して指導していきたいと考える。そして、このような臨地実習の積み重ねの後に、複数患者の記録を含めた看護援助を同時に行える能力を、卒業時までの臨地実習で実施できるように指導していくことが期待される。

文献

1)「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書（19年4月16日）看護教育, Vol.48 No.7, p563.
2)「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書（19年4月16日）看護教育, Vol.48 No.7, p570.

表1. 学生の複数患者受け持ち方式への意見　　(高齢者看護学実習を実習と略す)

大カテゴリー	中カテゴリー	ラベル
実習からの学び(35)	タイプの異なる患者を学ぶ機会(12)	タイプ・症状の全く異なる患者を見させていただいたので、とても良い勉強になった
		いろいろな患者を見る機会ができ、多くの学びができた
		一人の人のみの情報でなく、違った患者をみれると2倍学べた
		関わり方が異なる2人の患者をみる機会ができ、多くの学びができた
	具体的な看護援助の学び(10)	自分の受け持ち患者についてだけでなく、より多くのパターンをカンファレンスの話だけでなく、具体的に考え、学ぶことができた
		受け持ちの患者とは違う視点で関われたり、保清ケアもいつもより多く実習できた
		援助や工夫が必要な患者様とそうでない患者を受け持つことで、たくさんのケアに参加したり、実施できてたくさんのことを学べた
		清潔ケアや技術介入が少ない患者と多い患者様がペアになっていたので、2倍の学びが得られた
		様々な技術も体験できるし、無駄にナースステーションにいる時間が少なくなった
	学生間の情報の共有(6)	ペアだけでなくグループでもよく情報交換できた
		他のペアを見ていると、患者それぞれの違いを共有できて学びが多かった
		協力もできた
		1人でケア等に入るよりも2人でペアになって行うほうが気づきも多く、また患者に対するアセスメントなどの意見交換ができた
	実習の効果的調整(4)	ケアの時も2人で行ったので心強かった
		複数の受け持ちでも忙しいと感じることは少なかったので負担にもならなかった
		食事介助に時間のかかる患者は、ペアで休憩時間をずらせば全体的にケアに参加できた
		患者の優先度を考えてケアに当たれた
	実習により患者の個別性を学ぶ(2)	多くの患者を持たせてもらうことで、個別性について考えることができた
		状態も環境も違う方を複数受け持たせてもらったことで、担当とは違うケアを見れたり、同じリハビリやケアでも個別性があることを学べたりと短期間の実習の中でいろんなことが見れた
	指導者の声かけで実際が学べた(1)	指導者さんがいろいろなケア見学に声をかけてくださったので、ケアの実際について学ぶことができた
実習時の戸惑い(8)	ペア患者への関わりの戸惑い(4)	自分の受け持ちに関わる時間は減るし、他の患者の状態をあまり把握できないままケアに入るのは少し不安があった
		受け持ちにはなっていない患者(ペアの患者)とどこまで関わるのか、少しわかりづらかった
		ペアの人の受け持ちの方にどのくらい関わってもよいのか、自分の立ち位置に戸惑った
		他者の介入をあまり好まない患者に対して、普段あまり関わっていないのにケアの時だけ関わっていくというのが難しく感じた
	自分の受け持ち患者で精一杯(2)	ケアの多い同士がペアになると自分の担当の患者だけで精いっぱいになってしまい、ペアの担当の患者のところに行けなかった
		一人で複数受け持つのではないので、優先順位を決めても、ケアの時間が決定でないので、ケアの時間が重なると自分の患者を優先して、見学は結局なくなることが多かった
	自立度の差が違いすぎる患者との関わりの戸惑い(1)	あまりにも自立度に違いがありすぎて関わりが薄かった
	担当ナースの違いによる戸惑い(1)	担当ナースが違うと行動がしにくい時もあった
実習後の展望(4)	他領域臨地実習との関連(3)	他の実習ではないことなので、新鮮な感じがした
		少ない期間で多くのケアをすることもでき、今までの実習は患者の情報収集ばかりに時間をとられてしまい、ケアにあまり入ることができなかった
		他の実習でもペアで行動できたらいいのにと思った
	ペア以外の患者とも関わりたい(1)	ペアの方法もいいと思うが、他のメンバーの患者とももう少し関わってみたかった
実習での活用なし(1)	複数受け持ち実習はできない(1)	あまり活用できなかった

(　)は、ラベルの枚数を表す。